

移民社会サバにおける文化の創出

——サバ研究プロジェクト・ワークショップ参加報告——

山本博之（東京大学）

サバ・サラワクのマレーシアにおける重要度が増しつつある今日、サバ・サラワクを完全に除外してマレーシア研究を進めることは困難になりつつある。そのためもあってか、近年サバ・サラワク社会に研究者の目が集まり出している。

自然科学をのぞけば、従来よりこの方面で先行しているのは文化人類学者であった。これはサバ社会が文化的多様性でよく知られていることと無関係ではないだろう。もっとも、この多様性は、外来の観光客などからは好意的に見られることがあっても、地元社会には社会の平和と安定を脅かす要因と見て歓迎しない人も少なくない。

1994年からサバが近隣地域とともに進めている東ASEAN成長圏（BIMP-EAGA）構想は、この多様性に新たな意味を与える契機となりうる。サバ社会の多様性を構成する民族の多くはBIMP-EAGA域内に広く分布しているため、彼らを媒介することで域内の交流がより緊密になることが期待されるためである。このことは、サバ社会が自らの多様性を積極的に認知することを通じ、新たなサバ文化が形成される可能性があることも意味している。

では、BIMP-EAGA構想の推進に伴ってサバ社会はその多様性をどのように再認識し、いかなる新しい文化が創出されつつあるのか。

また、その前提となるサバ社会の多様性はそもそもいかにして形成されたのか。

以上の問題関心を踏まえ、これまでBIMP-EAGAの諸地域で各民族の調査を行ってきた文化人類学者がサバに集まったのが、宮崎恒二氏（東京外国語大学）を代表とするサバ研究プロジェクトである。このほどその第一期調査が終了し、現地側受け入れ機関であるサバ開発問題研究所（IDS）との共催で、2001年8月28日にサバ州コタキナバルで成果発表のワークショップが行われた。

同プロジェクトのメンバーのうち、今回ペーパーを提出したのはブギス人移民を調査した伊藤眞氏（東京都立大学）、マレー人概念を扱った富沢寿勇氏（静岡大学）、文化団体を扱った上杉富之氏（成城大学）、キリスト教徒フィリピン人を対象とした清水展氏（九州大学）、そしてエコツーリズムを題材とした山下晋司氏（東京大学）の5人であり¹、また、最終セッションでは共同司会の内堀基光氏（東京外国語大学）が総合討論に先立ってイバン人移

¹ 各報告の題名は以下の通り。「The Nature of Bugis Migration and Their Networks」（伊藤）、「Ethnic Indices and Their Meanings to the BIMP-EAGA Scheme」（富沢）、「Coping with Migration」（上杉）、「Searching for Socio-economic Niches in Sabah under BIMP-EAGA」（清水）、「Tourism Development in Sabah, Malaysia: A Remark on Ecotourism」（山下）。

民について報告を行った²。

*

前半の3報告は、結果的にムスリム系住民に話題が集まることになった。

伊藤報告は、19世紀半ばに漂着したブギス人によって沿岸部が切り拓かれて現在のタワウの原形が作られたことから語り起こし、ボルネオ・アバカ (BAL) 農園から木材生産業、さらに交通・運輸業へと変遷したブギス人移民の生業をまず概観する。これらブギス人を中核とする社会団体には、1946年設立のタワウ・マレー社会協会 (PKMT) と 1985年設立のサバ・ブギス人福祉協会 (PKBS) の2つがあり、主に前者は移民第一世代のブギス人の、後者はサバ生まれの若いブギス人の活動の場となっている。移民第一世代のブギス人は自発性や自立性を重んじて国家に頼ることをよしとしないが、他方サバ生まれのブギス人にとってはサバ社会の一員として認知されることが重要であり、国家や社会との結びつきが重視される。このように、世代ごとに「ブギス系マレー人」や「ブギス系サバ人」などと呼びうる異なるアイデンティティが生まれつつあり、しかもそれぞれが異なる社会団体に所属する傾向があることから、伊藤氏はブギス人としての一体性が危ぶまれると締めくくっている。

富沢報告は、一方にバジャウ文芸協会 (PSBB) を、他方に「マレー」を団体名に含む2つの文化団体であるタワウ・マレー社

会協会 (PKMT) とラハ・ダトゥ・マレー人種協会 (PRMLD) を置き、両者のマレー人概念を比較検討した。その結果、バジャウ文芸協会が近年イスラム教とマレー語の2つを強調し、狭義のマレー人概念に擦り寄っているように見えるのに対し、2つの「マレー」協会では「マレー人」をイスラム教やマレー語にとらわれず広義に解釈している。このことを踏まえ、富沢氏は、BIMP-EAGA構想の枠組みでの地域協力にあたっては後者の包括的なマレー人概念の方が好ましいように思われると結んでいる。

上杉報告は民族アイデンティティの核の1つとなる文化団体に注目した。文化団体が政治活動と密接に関係していることはよく知られており、現在のサバにおける民族アイデンティティを論じるためには、「サバ人のサバ」を掲げて全民族を結集した PBS 政権から民族別政党の連合体である BN 政権に移行した 1990年代前半のサバの政治動向との関連が無視できない。上杉氏はこの点に特に注意を喚起している。

上杉氏はさまざまな民族を取り上げているが、その中で特に興味深いのがビサヤ人の事例である。ビサヤ人は、もともとムレット人と同根でありながらイスラム化によってムレット人と異なるアイデンティティを持つに至った人々である。したがってビサヤ人はカダザンドゥスン人・ムレット人とムスリム原住民というサバにおける二大政治勢力のどちらにも帰属が可能な立場にある。

上杉報告によれば、1991年に UMNO がサ

² 「Short Notes on Iban Migration to Sabah」。

バに進出することで州内のムスリムの立場が強まると、ピサヤ人はカダザンドゥスン人・ムルット人側と距離を置いて自らのムスリム性を強調するようになった。しかし彼らはピサヤ人アイデンティティを放棄しようとはせず、しかもカダザンドゥスン人と同様に指導者に「族長」の称号を与えている。このことは、「UMNO 進出によってサバのムスリムは地位向上のために自己をマレー人と同一視するようになった」という一般的な理解への反証となりうる極めて興味深い事例であり、さらなる調査結果が期待される。

これらに対し、清水報告はキリスト教徒のフィリピン人が対象である。清水氏によれば、キリスト教徒フィリピン人はかつてサバの基幹産業である木材生産業の中核を担うために専門職としてサバに入植した人々であった。しかし現場での仕事がしだいに現地人にとって代われ、サバで「フィリピン人」にネガティブなイメージが与えられるに伴い、彼らは身元を隠すなどの生活を余儀なくされている。ただし、最近になってカトリック教会を拠点としたキリスト教徒フィリピン人の中から「フィリピン人」イメージの向上のための活動を始めた人々が登場している。依然としてキリスト教徒フィリピン人とイスラム教徒フィリピン人の間に溝があるとはいえ、清水氏はここにサバにおける「フィリピン人」の復権に向けた明るい兆しを見出している。

山下報告は、特定の民族に焦点を当てず、豊かな自然で知られるサバのエコツーリズムを通して文化の創出を見ようとした。しかし、

種々の野生動物で知られるキナバタンガン河スカウのリパークルーズは、油ヤシのプランテーション開発によって動物が川岸の狭い部分に追いやられたために可能となったものであった。また、ダイビングスポットとして名高いシパダン／マブール・リゾートは、英語を話し接客に長けたフィリピン人を従業員に雇うことで無国籍な観光地となっている。これらによっていかなる文化が創出され、それがどのように地元社会に還元されているかは疑わしく、サバのエコツーリズムは「皮肉」に満ちたものだと評した。

*

会場には、IDS、サバ大学（UMS）、サバ州立博物館、ボルネオ研究センター（BRC）、国立言語出版局（DBP）などから多くの研究者が集まり、また、エコツーリズム業者や文化団体の幹部など各報告に密接な関係のある人々も多数参加した。調査地で当事者を相手に研究成果を披露する以上、議論が盛り上がるであろうことは半ば予想されたことであったが、予想をはるかに上回る活発な議論となった。

これは報告者にとって自説に対する当事者の反応が聞けるという貴重な場となったが、報告者にさらに詳しい説明を求め、また、報告者の議論を補強し、発展させるような事例を紹介するコメントも少なくなく、これによって現地側の参加者にとっても有益な場となったようである。一般にマレーシア人は、研究者も含め、自分が帰属するコミュニティについては雄弁に語るものの他のコミュニティ

に対しては驚くほど無関心である。しかし外国人である報告者を間に挟んだやり取りとなったせいもあったためか、このワークショップは現地側の参加者にとって他コミュニティの事情を知る絶好の機会となった。IDS のヤアコブ・ジョハリ所長は、「我々はこれまで隣人たちとの協力が必要であると唱えながらも隣人たちを無視してきた。我々のこの態度を正すきっかけとなったこの研究プロジェクトを歓迎する」と語り、今後も同プロジェクトに積極的に支援を与えていく意向を明らかにした。翌日の地元各紙にワークショップの様子が写真入りで大きく取り上げられたことから、この研究プロジェクトに対する現地社会の関心の高さがうかがえる。

*

その一方で、この研究プロジェクトが扱う問題に対する日本人側と現地人側の双方が期待する方向のずれも明らかになった。これについて、最終セッションの共同司会として総括を行った IDS のビルソン・クルス氏のコメントから 2 点紹介したい。

一点目は、不法移民がどのようにしてサバに入り、住居や職場を確保しているのかという点の解明である。確かにこれは州行政に関わる者として最も関心のある問題であろうし、研究上も重要なテーマの 1 つである。しかし実際に調査を行うのは難しく、したがって本プロジェクトが調査対象を主に合法的な入植者に絞ったことを責めるのは不当であろう。ただし、移民系とされるどの民族にも合法的な入植者と非合法の入国者の両方が存在して

いる状況をふまえ、合法／非合法で線引きして一方だけを扱うのであれば、その意義を説明する努力が必要かもしれない。

二点目は、これら移民の到来によってサバにどのような文化が創出されたのかという問いである。確かに今回のワークショップではそれぞれの民族アイデンティティのゆくすが中心となり、サバという枠組みでの文化の創出については十分に踏み込んだ議論を行っていない。これはプロジェクト全体の今後の課題の 1 つとなるだろう。

この点に関連して興味深いのは本プロジェクト内部の見解の相違である。「移民系」の各民族を扱った報告者たちが、これらの民族が独立前からサバの発展を陰で支えてきたことを強調し、彼らを移民と捉えることに疑問を呈したのに対し、「先住民系」であるムルット人を長く調査した経験をもつ上杉氏の報告ではカダザンドゥスン人・ムルット人以外がどれも移民扱いされている。この食い違いは、それぞれの報告者が自分の調査対象である民族の立場を代弁する傾向にあるために生じたものだろう。そうであるならば、本プロジェクトのメンバーが今後それぞれの立場を明確にしつつ議論を重ねていけば、サバの人々になりかわる形でサバ社会をどう捉えるかを論じることになる。今回ワークショップに参加した現地側の参加者とともに、本プロジェクトの最終報告に大いに期待したい。